

# コロナ禍での研究をどう進めるか： 共に「戦う」研究者へ向けたメッセージ

東京大学大学院経済学研究科

大木清弘

okik@e.u-tokyo.ac.jp

# 概要

- 研究を真剣にやりたい方のみを対象としたお話をします。
  - 研究とは「他社から評価される一定の質のものを生み出し、世の中に公開するまでの一連のプロセス」と定義します。
  - 成果が現時点で出ているかどうかは問いません。年齢も問いません。そのプロセスにいると思う人全員が対象です。
  - 具体的に言えば、目標に対して自らを律してコミットできる方、その中で、今までの自分のやり方を否定されることも厭わない方です。
- お話する内容
  - ①我々が置かれている状況：今後起こること
  - ②やりたいことと研究業績：ズレと葛藤
  - ③何をすべきなのか：具体的な研究アプローチ

## ①我々が置かれている状況：今後起こること

- 現在、ビジネス系の学科はどの大学にも多数ありますが、今後大学の数は減っていきます。
- 国が科学研究を重視するとなれば、今後研究成果への基準が設けられることになります。
  - このような状況の中で、テニユアという制度自体がどうなるかもわからないと思っています（10年更新？）。
- 大学教員＝コロナ禍でのヘイトの対象？
  - 「大学名」「大学教員」という肩書がなくなった時、我々は生きていけるのか？誰が相手にしてくれるのか？

# 「正統性 (legitimacy)」の獲得に向けて

- 世の中に「居てもよい」と思われれば、大学教員として社会に生き残れる。例えば...
  - ①多数の研究業績を持つ。
  - ②資金調達能力が高い。
  - ③教育能力が高い。
  - ④企業等との外部コネクションが強い（アピールがうまい）。
- ※学内調整能力は大学がつぶれたら意味がない。大事ですけど。
- これらすべてを持ち合わせてもよいし、特化してもよい。  
→では研究で生きていくためにどうしていくべきか？

## ②やりたいことと研究業績：ズレと葛藤

- やりたいことを業績にしていくことの難しさ。
  - それができていらっしゃる素晴らしい先生もいる。
  - しかしテニュアを取る前の研究者に両者の両立を求めるのは酷。就職口や給与を用意しないと無責任。
  - 逆にテニュアを取った後は、そういう研究をすべきかもしれない（＝日本らしい研究）。
- 現時点の自分は、両者の交わりを前提にしない二刀流を目指している。
  - 悩むけど、今の自分の状況を考えると、在外研究に行くまではそれでやる。

### ③何をすべきなのか：具体的な研究アプローチ

#### ■ コロナを踏まえて、どのようなスタイルで情報を取るのか？

①既存の調査の整理

②公刊データ収集

③文献レビュー

#### ④コロナが少し空けたタイミングでの初動

例) 2021年10月に飲み屋で飲んでいたら→おっちゃんに絡まれて飲む→おっちゃんが経営者のネットワーク主催していて朝会に来るように誘ってもらう→その紹介で200人の企業家とのご縁→その飲み会に行く...→

# 個人的な研究戦略

- 研究者であるならば2年に1本は投稿論文を書き続けないと鈍ると思っています（これでも甘い？）。
- 「海外とは対話できないこと」「頑健性がやや弱いこと」を理解したうえで発信をするのであれば、国内ジャーナルや書籍でも良いと思います。
  - ただどの部分が足りないか、それをもし補うとすればどのような学習が必要なのか（またはどのように補うか）を考えた方が良いと思います。
  - また発信するときも「頑健性は弱いですが」ということをちゃんと踏まえて発信して欲しいと思います。

# 海外に出すのであれば...

## ※自分は全然だけど

- 既存研究に基づいた論理的な展開力を意識しましょう。特に「理論」に基づくことを意識しましょう。
- 方法論を勉強しましょう。定量でついていけないなら誰かと組む方が良いです。
- 私は発刊されている論文からリバーエンジニアリングしてきましたが、最近限界も感じます（とはいえその道は無駄ではなかったと思いますが）。  
→海外の人と組むのは近道だと思います。ただし、「ちゃんと」した関係で組むことが大事だと思います。



# 最後に

- 自分をプロテクトすることを考えないといけない。
- ただしその結果ギスギスするのでは本末転倒。
  - 良い研究を高めあう仲間という認識が必要。
  - 学会はそのための場であるべき。
- 何かあればご連絡ください。研究の話であれば歓迎です。